

構音障害患者様に対する取り組み

回心堂第二病院
萩原 久美子

はじめに

人間が社会生活を送る上でコミュニケーションは不可欠な要素である。その中で「言葉」は重要な手段である。疾患などにより、言葉を失うことで自分の意志がうまく伝えられず、ストレスが生じたり社会性が失われ、QOL低下を招く恐れがある。

球麻痺症状により嚥下障害が見られる患者様を経管栄養の離脱に成功した症例に引き続き発語が促せるのではないかと考え良い結果が得られたのでここに報告する。

患者紹介 -

名 前 : M.M様 72歳 女性 (以下M様と称す)
診断名 : 右被殻出血(左片麻痺)

2004年12月に右被殻出血を発症
K病院にて血腫除去術施行

2005年3月に胃瘻造設後、当院入院
食事はベッド臥床で胃瘻から注入

2006年5月 経管栄養を完全離脱する

介護展開

問題点

コミュニケーション・伝達力不足

楽しみ・充実感を得られない

ADLの低下

不安・うつ症状

介護の展開

長期目標

自己表現ができる

短期目標

発する単語が増える
表情が豊かになる

現状 -

いいえ

はい

おはよう

時折単語を発する

身振り・表情で意志を伝える

他者の言葉や話は理解できる

取り組みとその結果

摂食機能訓練

- ・歌・発声練習
- ・顔マッサージ
- ・本の読み聞かせ



音読

取り組みとその結果

- ・ 毎日の声かけ・席の工夫
- ・ 積極的な声かけと傾聴
- ・ 会話可能な患者様と同席



コミュニケーションの表出

取り組みとその結果

離床時間の拡大

- ・病棟リハビリへの参加
- ・おやつ時間の離床



笑顔

意思表示

考察 -

積極的な声かけ
と
傾聴する姿勢



パ行・タ行・ラ行・カ行
舌や唇、上あごの複雑な動き

離床時間の拡大
腹筋の強化

口・咽頭・喉頭・舌・呼吸筋
共働運動

刺激 反応 刺激

終わりに -

「刺激を与えることは、皮質における言語機能の再統合をもたらすことである」

—参考文献—

- 高齢者を支える看護・介護の知識と技術
- 現場ケア全書 リハビリ体操 発声体操
- 顔の体操
- ヒトはなぜことばを使えるか 脳と心のふしぎ
- 失語症のすべてが分かる本
- Nursing Selection 脳・神経疾患
- 言語障害事典